

## 研究ノート

アリス・ベーコンの *In the Land of the Gods* に見る日本女性観梅本 順子<sup>※1</sup>Images of Japanese Femininity from Alice M. Bacon's *In the Land of the Gods*Junko UMEMOTO<sup>※1</sup>

## ABSTRACT

Alice M. Bacon was an educator who had been invited to Japan to help develop a school for young women. She wrote three books on Japan, the last of which was a collection of ten supernatural stories called *In the Land of the Gods: Some Stories of Japan* (1905). Although she admitted that some of the stories were adapted from Lafcadio Hearn's writings, her originality came to the fore in the three opening tales. The first two are set at the time of the Russo-Japanese War. In "The Favor of Hachiman," a devoted mother mourning the death of her son sees him miraculously returned to her. In "At the Shrine of Fudō" a mother sacrifices herself so that her soldier son may be saved from certain death on the battlefield. In both stories, Bacon shows each mother full of a superstitious but inherently pious belief, which each uses to channel their abiding maternal love. The third story, "The Blue Flame," shows the bonds of love between a wife and her husband who has died tragically in an ill-fated military exercise in the winter snows of Aomori. Overcome with grief, the loving wife's death quickly follows that of her husband. My paper discusses the female protagonists in these three stories, with particular reference to the images of Japanese femininity they illustrate. I conclude that Bacon's three original stories show remarkable insight into Japanese femininity at the turn of the twentieth century that was rarely understood by ordinary Westerners.

## 1 はじめに

津田梅子の女子教育を支えるために来日したアリス・ベーコン (Alice M. Bacon) は、二回にわたる日本滞在を通して、日本というそれまで触れることのなかった未知の国の多様な側面を見聞する機会をもった。その体験は、二冊の日本人論 (*The Japanese Interior*, 1893 ならびに *Japanese Girls and Women*, 1902) にまとめられた。以前、拙稿で、ジュリア・カロザース (Julia Carrothers) やイサベラ・バード (Isabella Bird) とともに、ベーコンの日本女性の結婚や子育てに関する意見を紹介した<sup>1)</sup>。これらは、ベーコン自身の体験から誕生したものであるものの、公私にわたり彼女の相談に乗っていた梅子の助言が反映されている。それだけに、先に紹介した二人の日本女

性観よりは、日本人の心の内奥に触れた意見だと感じさせるものになった。

ベーコンは、これら二冊の日本論以外にも、本論で紹介する *In the Land of the Gods* (1905) と題する怪談集を出版している。このタイトルは文字通り『神々の国にて』(以下この呼称を使用) という意味であり、「多神教の日本にて」と置き換えることも可能である。八幡や不動などの、日本の庶民が信奉する神々がそれぞれの場面で重要な役割を果たしている。そればかりか、人を化かす生き物として知られ、時に稲荷の使いとなる狐も登場する。日本の近代化を支える教育を担うために招聘された知識人としてのベーコンが、旧弊を支持しているとして批判されるような視点から物語を書いているのである。これらの書

※1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University, Professor

物の特徴からは、ベーコンがこの作品を仕上げた意図の検討が必要となろう。

また、ベーコンのこの作品にみる伝統の日本のとらえ方は、同時代に日本人や日本文化について執筆し続けたラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の手法に類似している。ベーコン自身、その序文にて、ハーン作品に感化されたことを明言している。あとで詳述するが、ベーコンのこの作品集を形作る十篇の作品の過半数が、何らかの形でハーンの影響を受けていることは否定できない。ここでは、この作品集のうちでも、ベーコンらしさが発揮されたものを取り上げる。すなわち、日露戦争中に逝去したハーンが取りあげることができなかった日露戦争下の日本の妻や母たちを描いた作品に特に着目することにより、ベーコンの日本女性観を概観する。

## 2 創作の意図について

ベーコンの創作の意図として、砂田恵理加は「アリス・ベーコンの*In the Land of the Gods*に見る日本像」で、「ベーコンは、近代国家への道を意識的に歩もうとしていた日本とは対照的なイメージを強調し、伝統的で、清廉ではあるが、なすすべのない弱者として日本人を描くことで欧米人の同情を喚起し、対日危機感情を緩和しようとしたと読むことができる<sup>2)</sup>」と述べている。これ以外にも日露戦争による欧米の対日世論の悪化を防ぎ、親日感情を喚起するためには、伝統的な女性像が有効だと判断したからだとする。

ベーコンが欧米の読者に対して日本の立場を好意的に擁護したいという欲求にかられたことは確かであろう。しかし、「なすすべのない弱者」として描いたというのはいかがなものだろうか。外部者にとってはナンセンスと思われるようなことも、当の日本人にとっては信仰や価値観に基づくものがある。その点で、それまで西洋人が目を向けようとしなかったものにも、取り上げる価値があることをベーコンは理解したのではなかろうか。すなわち、キリスト教一辺倒の視点からは説明がつかないものの、視点を変えることで見えてくるものがあるとわかったのではなかろうか。

ベーコン自身、日本人の中にくらしてみても、貧しい階級の人々でも高い道徳心を持っていることを知る機会を持った。そのような経験を通して、西欧人が欧米以外の地域に住む人々に対して望む「文明化」とはいったい何なのか、その意味を考え直すようになっていたといえるだろう。欧米のキリスト教徒が

抱く「文明化」を日本人に適用することの是非については、日本を知れば知るほど疑問になる欧米人がいたことを、J. M. ヘニングはその著*Outposts of Civilization*において指摘している<sup>3)</sup>。

また、たいていの欧米人にとって文明化とはキリスト教化と同一であったことからして、日本の民間信仰などは当然、否定的にみられた。それだけに、おとぎ話とはいえ、民間信仰の対象となる不動や八幡、それにキツネなどが登場する物語をベーコンが書いた背景に、何らかの意図があると考えるのは至極当然のことかもしれない。ベーコンの作品中では、これらの民間信仰に傾倒する婦女子は、決して否定的に取り上げられたわけではない。西欧読者からしたら、迷信の一言で一蹴されてしまうようなことを、ベーコンは美化して描いている。

とりわけ最初の三作品を、ベーコンは戦争という極限状態で起きた家族の物語として仕上げた。西洋人にとって一見不可解な行為は、奇跡を願う人々の心情の発露に過ぎないのである。非常時に身を置く女性たちの姿は、文化の壁を越えて身近に感じられるものとなっている。すなわち、母子や夫婦の愛、またその一方を失うことによる喪失感、文化や人種を越えて普遍的なものであることを訴えかけるものとなっているのである。

とくに、子供や夫のことを気遣う母や妻の姿は、ベーコンが抱く日本女性像にならって形成されたのだった。さらに、夫婦の関係のみならず、夫の母との関係、もしくは義母から見た息子の嫁との関係など、家長を中心に成り立っていた当時の日本の大家族構造を理解していたベーコンならではの目配りが感じられる。そのような取り組みの中でベーコンが力を入れたのは、日本語の使用であった。日本的なニュアンスを増すために日本語は不可欠と判断してか、随所に交えており、日本的な雰囲気可能な限り大切にしながら、かつ西洋人読者が関心をもって読める工夫をしているのである。

## 3 ハーンの影響について

次にハーンから受けた影響について触れたい。ベーコンは、ハーン作品から示唆を受けたことをその序文で、次のように言明する。「本作品で触れられた怪談を十分理解しようとするなら、読者はラフカディオ・ハーン作品を参照すべきである。ハーンの*Japan: An Attempt at Interpretation*, 1904 (『日本—解釈の試み』)は、日本国民を精神面からもっとも包括的、かつ好意的に論じた研究書である。また、*Glimpses*

of *Unfamiliar Japan*, 1895 (『日本瞥見記』) の一卷目にある「キツネ」は、キツネ信仰の多様な側面に触れるものとなっている<sup>4)</sup>と述べている。

ベーコンがハーン作品に啓発された背景には、日本に関する本がきわめて少なかった当時の事情がある。極東でわずか30年ほどの間に台頭した未知の国、日本に対して欧米での関心が高まった。現地にて日本を直接体験した人びとによる作品は、フィクション、ノンフィクションを問わず、神秘の国のベールを剥ぐものとして歓迎されたのである。その中で、日本を多角的に、かつ総合的に描いた作品として、ハーンのもの为先駆的な役割を果たしていたのだ。

また、ベーコンの日本滞在期間がハーンと一時的ながら重なったことも大きい。そのころ、ハーンの記事が『アトランテック・マンズリー誌』(*The Atlantic Monthly*) に掲載され、ホートン・ミフリン社(Houghton Mifflin)をはじめ数社から、毎年のように日本関係の単行本が出版されていたのである。晩年のハーンのこのように旺盛な執筆活動が、ベーコンを刺激したのかもしれない。ベーコンも日本関係のおとぎ話を『アトランテック』に発表しており、それらをまとめて、作品集『神々の国にて』は誕生したのであった。

ハーンの影響は、ベーコンがその序文で言及した以外にも、彼女の実作品においてきわめて顕著である。例えば、先に触れたキツネの話以外にも、同じハーンの『日本瞥見記』から影響を受けたものに、ベーコンの第七話の“The Buyer of Ame”(「飴を買うもの」)がある。ハーン作品では、飴を買う幽霊の話は、松江にまつわる怪談話などを集めた「神々の国にて」(“The Province of Gods”)と題する長編のエッセイの一部を形成している。一部と述べたのは、ハーンの「神々の国」は、松江にまつわる様々な物語からなっており、「飴屋の幽霊」という話はわずか1ページをしめているに過ぎないからである。ハーンは、早々と埋葬されてしまった女性が、棺の中で出産した赤子をなんとか無事に育てようとする原話に忠実だった。そのため、女性が買い求めたのは茶碗で買う水飴である。棺内で生まれた新生児を養うために、乳のでない母は水飴に頼るしかないというところが、この物語の核心なのだ。

一方、ベーコン作品では、設定や人物描写の追加により、ハーン作品の数倍の長さになった。より現実味を感じさせる描写が続くものの、女性が買い求めた肝心の飴を、装飾された袋に入った棒状のもの、

すなわちお宮参りのための飴(千歳飴)にしているのである。これでは、生まれたばかりの赤子という設定を台無しにしてしまう。それだけに、手を加えすぎてかえって残念な結果になっている。

さらに、ベーコンの第八話“The Peony Lantern”(「牡丹灯籠」)はハーンの*In Ghostly Japan*, 1899 (『霊の日本』)の“The Passional Karma”(「恋の因果」)が下敷きとなっている。最後に、第九話の“The Lady of the Scroll”(「掛け軸の女」)はハーンの*Shadowings*, 1900 (『明暗』)の“The Screen-maiden”(「衝立の女」)がもとなる作品である。この第九話は次の第十話の“How Fumi remembered”(「ふみの記憶」)と二つ合わせて完結するという手の込んだ仕上がり作品である。過去の記憶をつないで恋を成就させるという点では、これら二作品とも、ハーン*The Romance of the Milky Way*, 1905 (『天の河奇譚』)の“The Story of Ito Norisuke”(「伊藤則資の話」)などの影響が見られる。過去において恋人だったものが世代を超えて生き返ってきたときに再び過去の記憶に引き戻されるというものである。

これらの例からも明らかなように、ベーコンは、ハーン作品の中でもとくに母性愛や男女の愛をテーマとするものを中心に切り上げ、それを土台に独自の作品に仕上げたのだ。ちなみにハーンがこだわったのは、一貫して「愛は死より強し」であった。ハーン自身、14年の日本滞在中で、最初のあまりに好意的な日本の印象は、時間とともに薄れていったことを認めているものの、その中で唯一彼にとって色あせることのなかったものとして強調するのが日本女性の存在だった。女性は社会的に立場が弱いだけに、意志を十分伝えることなくしてこの世を去ったものも多い。そのような女性たちが、幽霊となって思いを吐露する、あるいは行動する、そこに着目して作品をつくりあげたのである。

一方、ベーコンの来日理由は、日本の女子教育の一助となるために招聘を受け入れたことにある。当然、日本の知識階級や高貴な人々の子女が、その観察の対象になったことは言うまでもない。そういう恵まれた地位にある女性でも、西欧の婦人たちに比べればその行動は制限されたものになっていたであろう。反対に、身の回りの世話をしてくれる下女や下男らとのふれあいから、いわゆる特権階級ではない人々の暮らしをも観察する機会をもった。これらの社会的には恵まれたとは言えない階層の女性たちも、愛情や母性、並びに道徳心に関しては、高い身分の女性たちに比べてなんら遜色なく生きている。

それを目にしたとき、これらの女性がハーンの描く伝統社会に生きる女性と重なったのかもしれない。ベーコンは、時に創作の先駆者であるハーンへのオマージュとして、あるいは女性の視点から敢えてハーンへの挑戦を意識して創作したのかもしれない。

#### 4 日露戦争三部作にみる女性の愛

本論では、ハーン作品の影響が見られないベーコン独自のものを中心にみてゆく。ベーコンが日露戦争という非常時下の母と妻の心情を描いた作品として、第一話から三話までの三作品をとりあげる。これらは、ベーコンの考える日本の妻や母が、戦争という危機的状況の中で描き出されている。とくに息子や夫を戦地、もしくは軍事教練（第三話）に送り出した家族の心情が、その信仰心とともに描かれることとなった。第三話は日露戦争中のことではないものの、ロシアと戦争になることを想定して極寒の青森で訓練を執り行った日本陸軍が、多数の死傷者を出した八甲田山での行軍事件が下敷きとなっている。

これらの三編の話から、ベーコンが日本女性を通して訴えたかったものに焦点を当てる。日露戦争を背景に、母や妻として息子や夫を送り出した女性たちの不安、また、戦死された後の喪失感や悲しみなどが、日本女性の信仰心と相まって、不可思議な空間を作り上げている。その目的はいかなるものであろうと、日本人の信仰心、特に民間信仰への関心なくしてはとうてい成立しなかった話といえるだろう。

第一作「八幡様の功德」(“The Favor of Hachiman”)は、日露戦争に出征して三か月で戦死した息子の魂が、救出された別の赤子の肉体を通して蘇るというものである。息子を戦死で失った老夫婦は、お盆のある日、幼子を背負う旅の若い女性に出会い、その窮状を察した夫婦は、自宅での休息を促し食事をふるまう。この女性の夫は戦死し、その忘れ形見とともに親戚のもとに行く旅の途中であることを聞き出す。夫婦は天候の急変を恐れて若い母親に宿泊するよう勧めるものの、先を急ぐ母親は敢えてそれを振り切って出かけ、豪雨の中、濁流に飲み込まれて命を落とす。赤子も一緒に飲み込まれたものの、その命を救われる。この赤子の肉体には、戦死したはずの老夫婦の長男の魂が入り込んでおり、彼らは母を失った赤子を戦死した長男の身代わりに育てることになる。これは彼らが信仰していた八幡様の功德として受け止められたというものである。

信仰を印象付けるのは次のような描写である。幼

子が老夫婦の家に戻ってくるのを知らせたのが、八幡様の使いの蛇であること、ならびに老夫婦の家に帰ってくる赤子が、竿の先に糸で結びつけてお馬として振り回すものがトンボであったことなどがあげられる。その赤子は、老夫婦の家につくや、真っ先に仏壇の盆飾りの前に行き、「太郎のお馬」と叫んでいる。死者の霊はトンボとなって現れるということ、また、盆の日には死者が馬に乗って帰ってくることなど、仏教に関する日本の庶民の信仰がその風習と共に描かれているのである。

さらに、老夫婦の夫の方は、赤子のことで警察に出頭しただけでなく、村の寺院の僧侶にも相談に行く。これを聞いた僧侶は、老夫婦が貧しい母子に施した親切に加え、息子を失ったにもかかわらず八幡様への信仰を続けてきたことが、このような形で功德を受けるに至ったのだと説くのだ。また、若い母親の遺体が見つかった場所に祠を建てて祀り、親子で供養を続け、子子孫孫までもこのことを忘れぬように語り継ぐことを命じるのであった。

この作品では妻だけでなく、夫もそろって敬虔な態度で過ごしてきた。そのような生き方に対し、信仰の対象となっていた八幡様がその無垢な心に報いたという作品である。大きな役割を果たすのは、母親の息子に対する思いである。それは、幼子を抱えて旅をする若い母親に対する気配りや思いやりの中にも描かれる。幼児の姿となって帰還した息子を家に迎え入れるのも妻である。しかも、この作品は、冒頭でも述べたように、日露戦争が背景になっており、若い母親は戦争で夫を亡くし、老夫婦は息子を亡くした。この二組の最愛の人を失った人々が、八幡様の功德で巡り会わせられ、しかもそれぞれの子供は、一方は肉体として、もう一方は魂として生き残り、次の世代へと命をつないでゆくのであった。

第二作「お不動様にて」(“At the Shrine of Fudo”)は、不動信仰の賜物というべき、神の功德で戦争から無事生還した話である。日露戦争に出征した息子の無事を祈って、母親は御百度参りを続ける。赤子を抱える息子の嫁に代わって母がそれを行ってきたのだ。息子はやがて無事に帰還するが、母親は身代わりとなって急逝する。息子の無事の帰還とその後の息子が営む家庭の幸せを強く願っていた母の思いが、自分の身を犠牲にすることにより聞きとどけられたというものである。

最初の山場は、自分の出征を母や妻にいかにか知らせるか、思案にふける息子の姿である。特に母への思いはひとしおである。夫が戦死したことにより

若くして未亡人になった母は、官立学校の教師として息子の成長だけを楽しみに頑張ってきた。息子が幼かった頃、ときには母の不在をさみしいと感じることもあったが、掌中の珠のごとく大切に息子を成人させたのだった。その最愛の息子は、自分が父と同様に若くして戦死した場合、母がどれほど落胆するかを想像すると、戦地に赴くことをどのように告げたらよいのか、思案するのであった。

一方、身重の妻の今後にも思いをはせる。無事に生まれれば、夫が戦死してもその子供が彼女の生きがいとなって支えるだろうし、もし死産だとしても、実家に帰って再びどこかに嫁ぐ機会が訪れるというものだった。息子が独立し、嫁が来たことで、やっとご隠居として楽ができるはずの老母が、息子の死によってどれほど打ちのめされるかを考える方が、当の息子にとってはよほど辛かったのである。この作品で、母の方が嫁より大切に取り扱われているのは、当時の儒教道徳に基づく日本社会の人間関係を、ベーコンが知っていたからだろう。また、この物語の本質が、母性賛美にあることからしても当然といえるかもしれない。

そのような息子の心配をよそに、息子から出征を知らされた母は、西南戦争の折に西郷に従って戦死した父の汚名そそぐためにも、息子には戦場にて最善を尽くすよう訴えるのだった。ベーコンの作品中にあるこれらの描写からは、第二次世界大戦が終わるまで続いた「滅私奉公」ならびに「賢母」の姿が浮き彫りになるのだった。さらに、「軍人勅諭」まで引用して国家への献身を息子に説くあたりからは、その短期間の滞在中にベーコンがいかに日本社会の構造を学んだかがうかがわれる。

女子留学生の一人である大山（山川）捨松に対し、ホストファミリーとして接してきたベーコンは、薩摩や新政府の事情などにも通じていたことだろう。夫と妻が作る西洋の家族観とは全く異なる、大家族型の日本の家族が、夫や息子を戦場に送り出すという極限状態に置かれると、いかにふるまうかが問われている。また期待を受けた息子の立身出世はいかに達成されるかということもこの作品を通して描かれることになったのである。

さらに息子が出征した後で無事誕生した幼子を巡る、祖母としての老母と若い母親の軋轢にも触れた。いくら孫を愛おしく思おうと、乳をくれる母にはかなわないことは、自分と息子との関係からも明らかだった。それだけに、自分が息子に唯一してやれるのは、出征した息子の無事を祈って御百度参りを続

けることであった。老母が疲れているようなので、お供に女中をつけるよう若い嫁は進言するが、聞き入れられなかった。ただ、老母は黙々と自分の勤めに専心したのである。

数か月にわたる御百度参りが続き、いよいよ食事さえとることができなくなるほど憔悴した老母は、若い嫁を枕元に呼びつけて、念願がかなったことを伝える。息子のかわりに自分の命をささげるとお不動様に願ってきたが、その願いがついに聞き届けられたことを告げて亡くなるのであった。その息子に対する最後の言葉が「私と一緒に来なさい」というものであった。

一方、ロシアとの戦いで深手を負った息子は意識を失って倒れていたものの、母の「一緒に来なさい」という言葉を聞いたような気がして我に返る。やっとの思いで味方の兵士が去った後の塹壕にたどり着く。やがて味方に発見されて病院に収容されるが、そこに母の死を知らせる手紙が届くという設定である。

母の息子を思う気持ちの強さがこの上なく発揮された作品である。妻も登場するものの、母子の絆の中には入り込めない。一方、若い妻はまた自分の子息との間にほかのものが入り込めない絆を築こうとしているのである。そこに描かれたのは、ベーコンが考える日本の母子の絆の強さだといえるだろう。また、お不動様への御百度参りは、日本の庶民が考える願掛けの一例であり、自分の願いが聞き届けられるためには、自分の命さえ惜しまない。いやむしろ、自分の命を犠牲にして心願を成就させるのがその在り方だと述べているかのようである。

西洋人の眼には、それは野蛮な風習と映るかもしれないが、かけた願いを成就させるには当然犠牲が払われるべきであり、自分の一番大切なものを断つとか、犠牲にするのは当たり前とされたのである。自分の命と引き換えに願い事をするのは、極限状態に追いやられた日本の庶民が行う最後の手段であった。ただし、神を相手に駆け引きをするというような否定的な意味合いはない。神の前で誓ったことを確実に実行することによって、その願いの強さと偽りのなさを証明する聖なる行為とされたのである。

最後に取り上げたいのは、第三話“The Blue Flame”（青白い炎）と題する物語である。第一話や第二話に比べるとずっと短い話であり、ここでは若夫婦の愛の姿が描かれる。文字通りタイトルの「青白い炎」とは「人魂」のことであり、亡くなった人の霊が人前に現れるときには、「青白い炎」となってふっと軽

やかに飛ぶということが、日本人の間でこれまで言い伝えられてきた。

そして、すでに述べたとおり、これは日露戦争前に行われた八甲田山での事件がもとになっている。厳冬に行われた軍事訓練の最中に命を落とした夫が魂となって、愛しい妻のもとに帰るといふ話である。ベーコンはこの話を始める前のページに、読者の理解のために注にあたる説明をつけている。それによると、「この物語は、1901年の2月（ベーコンの誤り、1月23日から行軍を開始した）に行われた傷ましい「雪の行軍」といわれる事件と関係している。日本軍はシベリアの冬の状況に耐えられるかどうかを、この行軍によって試そうとしたのである」<sup>5)</sup>と述べている。

やがて来るロシアとの決戦を想定した日本陸軍は、日本国内では冬場の気候が厳しい、青森県の八甲田山で行軍を開始した。その機動力を試そうとしたものの、荒天の下、スケジュールや決断の誤り、それに装備の不十分さなどいくつかの要因が重なって、行軍の最中に遭難し、行軍参加者210名中199名が死亡という痛ましい事故が起きた。山岳事故、ならびに軍事訓練のどちらの面からも最大級の死者を出した大惨事である。

ベーコンはこの短編を、夫の帰りを待っている若い妻の側から描いている。夫の帰宅に合わせて甲斐甲斐しく食事の準備をする妻は、出入り口で夫を迎え入れようと準備に余念がない。爺やや女中もいる中で、奮闘する妻のところに帰宅した夫の様相には、冷えきった体や凍り付いたひげなどの異変が見られる。夫は暖かくしてあったこたつに入ることはなく、無言のまま雪の中に消えてゆく。そんな夫を追いかけて外に飛び出す妻の周りには青白い炎が飛んでおり、その炎と共に妻の命もつきののであった。

これだけでは、何が起こったか不明のままだが、この四日後に救出された兵士の証言から、行動を共にしていた中尉こと、この物語の主人公の夫の最後が明らかになる。遭難した後の凍えながらの彷徨の様子が語られる。力尽きた中尉は、これ以上自分のために時間を割かないように申し渡す。ただ妻にだけは自分の死を伝えたいとあって崩れ落ちるのだった。

これを聞いた兵士は中尉をゆすってみるものものはやこと切れており、その体からは青白い炎が揺らめきながら飛び出すのを見る。兵士は自分の父親が亡くなる時にこのような青白い炎を見ていることから、改めて中尉の死を確認する。その青白い炎は

雪原を横切って夜の闇のとばりの中に消えて行ってしまったが、それを追いかけた兵士は、最終的に救出されたのであった。

この話を聞いていた同僚は、中尉の妻も亡くなっていたことを話して聞かせる。中尉の家に仕えてきた爺やの話として、不可思議な出来事を伝えるのであった。すなわち、ご主人の奇妙な帰着の様子と雪のトンネルの中に消えていった青白い炎の話をした。中尉の死をみとった兵士は、それを聞いて、妻に自分の死を知らせたいとする中尉の思いが叶ったことを確認する。兵士の言葉、“Poor little woman! She was not a widow very long!”<sup>6)</sup>(奥さん、おかわいそうに。すぐにご主人のあとを追ったのですね!)をもってこの話は終わる。短いながら、日本人の信じる人魂のこと、並びに肉体は滅びても心はつながっているという、日本人の心情が前作同様に垣間見られる作品となっている。

八甲田山の行軍事件は、1971年に新田次郎によって『八甲田山死の彷徨』として作品化されるまで、大々的に作品として言及されることはあまりなかった。その点、事件から三年余りで、これをテーマに短編に作り上げたことに、ベーコンが当時の日本の情報を、いかに関心をもって収集していたかがうかがわれる。

また、当時の時事問題をテーマにしながらも、これらの事件から直接影響を受けることになった妻の視点から事件を描いたことに、ベーコンの日本女性への関心の高さがうかがえる。特に夫に殉じた妻の死という印象を残して終わらせたところに、ベーコンの工夫がある。果たして欧米の読者がそれをどのように解釈するかは別として、先に引用した兵士の言葉の背景には、夫の妻への思いが成就したというだけではなく、夫の霊の帰還で、その死を察知した妻が後を追ったことがわかる。未亡人であったのはほんの束の間のこと、彼女も夫のあとを追うかのように亡くなってしまったのである。喪失感に長くさいなまれないで妻が旅立ったことに、何らかの救いがあったと感じさせる幕切れである。

## 5 おわりに

ベーコンの本が出版された当時の記事として、雑誌『英文新誌』の“Editor's Desk”と題した、編集者によるベーコンとハーンを比較した寸評がある。ベーコンの『神々の国にて』を構成している十篇を英語のタイトルのまま紹介したうえで、「この十篇の怪談は決して在来の日本に伝わるものの翻訳ではなく、

日本人民の間に流布する神仏の利益、狐狸談等の思想を骨子として、著者の新意匠を以てoriginal storiesとなしたのである。これぞ、up-to-dateのghost storiesで、Lafcadio Hearn's "Kwaidan"の如き旧くさい話の翻訳ではないのである。』<sup>7)</sup>と述べている。この『英文新誌』が津田塾の関係者により発行されていることを考慮すれば、ベーコンを高く評価するのは当然のことかもしれない。

ハーンの作品も翻案であり、決して忠実な翻訳ではないものの、ベーコンの作品は、翻案を通り越して、創作の域に達した作品も多い。ただし、その作品の何篇かはハーン作品に何らかの示唆をうけていることはすでに指摘したとおりである。また、時には「飴屋の幽霊」のように手を加えすぎたために、必死の思いで乳飲み子を守り育てるといふ母の健気を損なうという失敗もした。

ただ、ハーンがかかわっていない日露戦争関係の作品にむしろベーコンらしさがのぞかれる。とくに、同じ女性という立場から、等身大の女性を描いたところにベーコンの日本女性に対する親しみすら感じさせる。また、日本女性の神仏への素朴な信仰心が生活といかに深くかかわっていたかを丁寧に描いた点に特徴がある。

ベーコンは宣教活動のために来日したのではないにしろ、父親は牧師であり、近代化を急ぐ日本にとってのキリスト教化の有用性を信じて行動してきたはずである。しかし、すでに冒頭部分で触れたように、ベーコンが異教徒とはいえモラルの高い日本人を知るにつれ、キリスト教を文明化のための万能薬として押し付けることに疑問を感じ始めていたことは考えられる。しかし、ややもすれば、西洋人一般には迷信とみられてしまうような、民間信仰の功德を強調する作品に仕上げたことは、想像を超えるものであった。

一方、来日してからのハーンは、キリスト教に対する態度を硬化させ、欧米社会の持つキリスト教的価値観とは真っ向から対立する立場をとった。日本が西洋に飲みこまれないようにと願い、日本文化の維持を目標に行動したのである。教え子には科学をはじめとした学問を志し、国家の発展に寄与するような人物になるよう説く一方で、日本の伝統文化の継承を強く訴えた。そのようなハーンであったから、庶民の間に流布した不可思議な怪談話の収集とそれを語りなおしたいいわゆる翻案ものの創作に余念がなかったのだろう。

そのようなハーンに対し、ベーコンの目的は全く

異なっていた。日本の近代化には女子教育が不可欠であるために、その道の専門である彼女が招聘されたのである。ベーコンの仕事は、教育により新時代にふさわしい女性を育むことであったが、作品の中で描いたのはむしろ伝統社会に生きる女性たちであった。それだけに、前述したように、砂田説のベーコンは原始的だが悪気のない庶民を作り上げることで、日本の立場を擁護しようとしたという説明が生きてくるのかもしれない。

ただ、日露戦争関係の物語を見る限りにおいて、日本の海外進出に対する欧米人の不信感を和らげ、親日的風潮を盛り上げるためとはいえ、迷信に翻弄される暗愚な日本庶民像を敢えて作ろうとは考えなかったのではなかろうか。ベーコンが日本庶民の信仰を強調したのは、ネガティブな印象を植え付けるためではなく、一見単純にみえようとひたすら神を信じる姿を描き、その背景にある万国共通の母性の強さを描き出そうとしたのではなかろうか。

また、迷信として一蹴されてしまうような信仰かもしれないが、その信仰は家族を思いやる気持ちから出てきたものである。子供を抱える母への周囲の優しさが奇跡を生むとしたら、単に旧弊として退けるものではないだろう。すがる思いで奇跡を信じる庶民の姿は、西欧人読者にも肯定的に受け入れられるはずである。

さらにもう一点、ベーコンがこれらの作品を書いた理由として考えられるのは、ベーコンのハーンへの挑戦である。既に触れたようにハーン作品の影響が、いくつかの作品の中でかなり顕著に把握されるものの、ここで取り上げた三作品はベーコンのオリジナルである。ハーンは幽霊となった日本女性を数多く描いてきたが、同性の手によってハーンに勝るような日本女性を描きたいというベーコンの強い意欲がのぞかれる。だからこそ、戦争という危機的状況下で発揮される日本女性の母性が、各々の物語を通して遅く、語られることになったといえるだろう。

## 注

- 1) 梅本順子、「欧米女性が見た明治期の日本：日本女性観を中心に」日本大学国際関係学部国際関係研究所『国際関係研究』第33巻第2号，2013
- 2) 砂田恵理加，「Alice Baconの*In the Land of the Gods*に見る日本像」アメリカ学会『アメリカ研究』35号，2001，161.
- 3) Joseph M. Henning, *Outposts of Civilization* (N.Y.:

New York University Press, 2000) 72.

4) Alice M. Bacon, *In the Land of the Gods: Some Stories of Japan* (N.Y.: Houghton Mifflin, 1905) Preface (ix)

5) Alice M. Bacon, 74 (冒頭部分)

6) Alice M. Bacon, 83.

7) 『英文新誌』第3卷70号(1905年11月15日) Editor's Desk